

第1報告（講演会報告／翻訳）

批判的实在論への導入

バーズ・ダナーマーク（Berth Danermark）ⁱ，堀 正晴ⁱⁱ 訳

（当発表は、『社会を説明する』（ナカニシヤ出版、2015）[*Explaining Society, Critical Realism in Social Sciences*, Routledge 2002] の第2章・第3章に基づくものである。B. Danermark）

（※本報告は、当時邦訳出版準備中の上掲書と重複する部分が多い。その部分は、齟齬を生まないことを考慮し、訳者グループの承認を得て校正中の翻訳原稿を利用させていただいたことをお断りしておく。

堀 正晴）

私は、本発表において、批判的实在論の基本的な諸概念のいくつか（知識、实在のドメイン、实在の意存的〔transitive〕次元と自存的〔intransitive〕次元、实在のメカニズムと因果性および諸レベル）について、概要的な案内を提示するつもりである。私はこの発表を、科学における最大の中心的争点、すなわち、科学と实在ならびに諸概念との関係という問題から始めよう。

世界を理解し説明しようとするあらゆる科学的な（そして日常的な）試みは、世界についての私たちの概念から出発しているのである。あらゆる研究プロジェクトにおいて、その目的のひとつの重要な側面は、今手にしている实在についての私たちの概念にたいして影響を及ぼすこと、つまり見直し、修正し、改良し、もしくは革命的に変えることである。批判的实在論は、实在的世界とそれについて私たちが形づくる概念との間の関係こそが、その研究プロセスにおける焦点であることを指摘する。そこでまず、知識と知識の対象との間の関係を見ることから

始める。この考察は、实在是客観的实在性〔objective existence〕をもっているが、しかし、それについての私たちの知識は概念的に媒介されているのだという命題を私たちにもたす。つまり、事実〔fact〕は理論依存的〔theory-dependent〕〔下線は著者、以下同様〕であって、理論決定的〔theory-determined〕ではないのである。逆にこのことは、すべての知識は実際のところ可謬的〔fallible〕であり、修正に対して開かれているということを意味する。とはいえ、このことは、すべての知識が完全に均等に可謬的であるということを意味するわけではない。

实在是、社会科学における場合と同様に自然科学においても概念的に媒介されている。とはいえ、そこにはなお大きな違いがある。自然科学の研究者にとっての対象は、自然に生み出されているが社会的に定義されている。これにたいして、社会科学者の対象は、社会的に生み出され、かつ社会的に定義されている。このことは、自然科学の対象は、研究者の定義づけとの関係において受動的であったり、また定義づけとの関係で変化したりはしないということの意味している。例えば、重力は、私たちがそれについての定義を変えたとしても、変化しないのである。

i スウェーデン オレブロ大学 スウェーデン障害研究所

ii 立命館大学法学部教授

社会科学の対象は、他の人びとを含んでいる。彼らは活発な参加者であり、彼ら自身による定義づけをするし、彼ら自身による概念を形づくる。そして、これらの定義づけや概念が、研究対象としての社会的世界を構成するのである。そこで、それらの諸概念は、社会科学のなかで形成される諸概念と統合されなければならないのである。そのうえ、新たな経験と新たな知識と連動して自分たち自身を変容させるという人々がもつ高度の能力は、研究対象である社会現象それ自体における止むことなき変容を生み出すのである。このことをすべてまとめて考えると、社会科学における概念化は、自然科学における概念化とは大きく異なる条件のもとで行なわれるということの意味している。

このまま続ける前に、知識について焦点を当てておこう。「知識」とは、厳密にはいったい何であろうか。他の種類の知識に比べて、ある種の知識を科学的なものにしているのは、いったい何であろうか。科学の「技巧 (art)」は、ますます洗練された観察技術を発展させ獲得するということの意味している。というのも、そうした技巧は、独特の「科学的資格 (scientific quality)」や研究結果の真実性 [truth] を保証するのである。しかし、科学のこの理想に対する批判は、特に言語・概念と、実在との間の複雑な関係について、注意を喚起した。この批判は説得力をもって次のことを示した。すなわち、科学的概念 (理論) と、(その理論を実証ないし反証するものとして想定される)「中立的」な実験的「事実」との間には、相互依存性が存在するということである。事実は理論依存的ないしは理論負荷的なのである。客観主義に対する批判は、相異なる方向を行ったり来たりする動揺をもたらし、相対主義的な立場へと導いていった。相対主義のよりいっそう過激な形態においては、相対主義はあらゆる知識がどこまでも相対的であり、それゆえ普遍的知識や普遍的真理を探し求めることはまったく無意味であることを含意しているように思われる。

批判的実在論は、それが解放的な知識に向けた積極的な要求を主張しようと試みる時には、このような「相対主義への」批判を念頭に置いているのである。

存在論：科学の存立が可能であるためには、実在はどのようなものでなければならないか。

それでは、科学と実在との間の関係、すなわち科学とその対象との間の関係はいかなるものであろうか。「存在するもの」および「事物の本質」についての諸前提は存在論の問題であり、必然的に、私たちが形成するあらゆるほかの諸前提にとっての基礎を形づくらなければならない。私たちは、どのようにして、実在がそれについての私たちの概念の向こう側に、それとは独立して存在していると主張することができるのであろうか。[というのも] だれも自分たちの概念世界から離れて、概念的予断から自由に、実在が「本当に存在する」のかどうか、あるいは実在が「本質的に何である」のかを調べることはできない [からである]。そしてたとえそれができるとしても、私たちはそのことを十分には理解できないであろう。

日常の実践において、実在の自立的存在についての最も明らかな証拠は、私たちが間違いを犯しうるという事実である。物理世界に関しては、私たちが空を飛べるようになりたいと望んだり、水の上を歩けるようになりたいと望んだり、あるいは閉じたドアを通り抜けられるようになりたいと望むことが可能かどうかはすぐに分かる。しかし、社会的実在に関しても、事情は同じである。たとえば、誰かが、社会規範の邪魔立てや束縛や義務を受けることなく「自由な生活」を送りたいと望むとしても、その者は直ちに逆効果的な境遇、たぶん刑務所のなかにいる自分を見出すだろう。実在は必ずしも、その実在についての私たちの期待や理解に従って反応するものではなく、著しい自立性をもって反応するもので

ある。私たちは、そのような経験をどのように理解すべきであろうか。

科学と实在との間の関係という問題についての批判的实在論の解決策は、出発点を実践に取ることである。根本的な存在論的問いは、次のようなものになるだろう。すなわち、科学の存立が可能であるためには、 实在はどのようなものでなければならないか、 という問いである（Bhaskar 1978）。この問いは、この活動つまり実践としての科学の特徴は現実にはどのようなものであるかということに関する、いくつかの副次的な問いに分けられる。すなわち、研究者が現に行なっていることは何か。彼らが探し求めているものは何なのか。この実践がそもそも何かの目的に仕えることができるためには、实在の どのような性質が不可欠な条件となっているのか、 という問いがそれである。

もしも私たちは、研究者が研究している時に彼らが実際に何をしているのかという問いをもって始めるならば、実験こそが、一般に実践的な研究活動において中心的な手続きとして際立っているということが分かる。

実験：その一例

前世紀の初頭において、身体機能に対する神経によるコントロールは、電気による刺激のかたちで直接的に働くものであると一般的には信じられていた。しかし、この説明はいくつかの問題を含んでいた。なぜなら、同一の刺激が様々な器官に相異なる効果を及ぼすことになったからである。実験を通じて、ノーベル賞受賞者レーヴィは、この問題を解決した。

彼は、2つの蛙の心臓を取り出し、ひとつはすべての神経が無傷のままであるものと、もうひとつはまったく神経の無いものであった。彼はひとつめの心臓を食塩水に入れて、迷走神経に刺激を与えた。

その迷走神経は「運動を」遅らせる効果をもっており、したがって心拍数が下がった。[そこには]ある科学物質が放出されてその溶液のなかにあり、そしてまた、もうひとつの心臓（たとえこの心臓が神経をまったく持たないものであったとしても）にも同じように作用したのである。彼は今や、その科学物質が筋肉を通して「筋肉の活動を刺激するように」働いたと結論づけることができた。彼の実験は、偉大な科学的発見をもたらしたのである。しかしレーヴィは、実際のところ何をしたのであるか。

实在の3つのドメイン

実験は、实在への能動的な介入として表現することができる。実験の目的は、实在に関してまだ知られていない何かを、「発見する」こと、「検出する」こと、「暴露する」こと、「探り出す」こと、などであった。実験をおこなう必要があるということは、事物がどのようにして实在のなかで生起するのかについて、ただ受動的に登録し記録するなどということは不可能であるということを証示している。[そのためには]自然の出来事を操作することが必要なのである。そしてこの体系的操作が与えられれば、实在は反応を示し、研究者に成果をもたらす。しかし、ここで重要なことは、研究者は、まさにレーヴィが行なったように、それらの成果を生産しなければならないということである。そして彼らが得る成果は、科学理論によって構築されており、实在についての私たちの概念化全体のもとに包括されているということである。

このような科学的実践が存在するということから、私たちは次のように結論づけることができる。第一に、实在は、それについての私たちの概念と知識からは独立して存在しているということ。第二に、この实在およびこの实在のふるまい方は、重要な観点からして、直接的な観察によって接近可能なものではないということであり、この实在は「外から観察

できるような] 透明なものではない。この実在は、私たちが観察できないパワーやメカニズムをもって
いるのである。しかし私たちは、それがもっている
[何かの] 原因となる能力、つまり事物をこの世界
に生じさせる能力によって、間接的にそれらを経験
することができるのである。この洞察こそ、批判的
実在論の科学哲学の基本中の基本を作り上げている
ものである。

批判的実在論の創始者であるロイ・バスカー
(Roy Bhaskar) は、私たちに、次のような「存在論
的マップ」を提供している。すなわち、次の3つの
存在論的ドメインを区別できるというものである。
それは、経験のドメイン、アクチュアルなドメイン、
そして実在のドメインである。経験のドメインは、
私たちが直接または間接に経験する事柄から成り立
っている。これは、私たちがそれを経験するしない
にかかわらず、出来事が生起しているアクチュアル
なドメインとは区別される。この世界で起こってい
る事柄は、観察される事柄と同じではないのである。
しかしこのアクチュアルなドメインは、今度は実在
のドメインから区別されることになる。実在のドメ
インにおいてはまた、この世界のなかにさまざまな
出来事を生み出すことのできるもの、隠喩的にメカ
ニズムと呼びうるものがある。

すべての私たちのデータは何らかの理論と関連し
て現われ、したがって、私たちはいかなる直接的な
しかたでも、出来事を直接に経験することはないの
である。このこと〔経験の直接性〕は、経験主義的
研究の伝統が求めているものである。データは常に
私たちの理論的概念によって媒介されている。した
がって、「経験世界」というややありふれた表現は、
基本的に誤解を招くものである。この表現は、バス
カー (1978: 36) が「認識論的誤謬 (the epistemic
fallacy)」と呼ぶものを表している。なぜならば、こ
の表現はあの3つのドメインをひとつのドメインに
還元するからである。つまり、それは、何が存在し

ているのか〔という問題〕を、私たちは何を知りう
るのか〔という問題〕に還元してしまうのである。
科学の仕事とは、むしろ、私たちが経験すること、
実際に起こっていること、およびこの世界において
さまざまな出来事を生み出している根底のメカニズ
ム、との間の関係性と無関係性、それぞれについて、
探究し確定することなのである。

実在の第三のドメイン、すなわち生成メカニズム
がそこで見出されるところの深い次元の観察〔とい
う考え方〕は、批判的実在論を他の種類の実在論か
ら区別するものである。そして、この考え方は、自
然的実在と同様に、社会的実在にもあてはまる。

科学の意存的 [transitive] な対象と自存的 [intransitive] な対象

批判的実在論は、科学の方法が必然的に出来事の
観察を含むと主張するが、しかし実在の深い次元の
ゆえに、この次元は経験的なレベルでの現象の観察
に還元されうるものではないということを主張する。
有用な知識を獲得するためには、私たちが経験的な
出来事を生み出しているメカニズムを知ることが不
可欠なのである。しかも、それらはほとんど直接に
は目に見えないものなのである。とはいえ、私たち
が確かに得たその知識はまた常に可謬的なものであ
り。その有用性も、相異なる条件のもとで様々なの
である。

認識論的誤謬へのコミットを回避することは可能
である。もしも私たちが、何が存在するのかという
問いを、どのように私たちは知ることができるのか
という問いに還元することをやめれば、科学は科学
それ自体からは独立して存在する、あるものについ
て扱うということが導き出される。このことは、私
たちが科学は2つの次元、すなわち自存的次元と意
存的次元をもっているという事実¹に注意を払うこと
を意味する。理論は、科学の意存的対象なのである。

そして理論は、科学を實在と間接的につなげている次元を構成する。しかし、あらゆる知識が可謬的なものであることを認めておくならば、理論は實在に関してその時点で私たちがもっている最も真実なものとみなすことができるのである。

自然科学の対象と社会科学の対象との間には本質的な違いがあるけれども、この論証の原理は、社会科学の問題にも応用できるのである。その重点は、科学の意存的対象、すなわち實在についての理論は、他のいかなる知識とも同じように社会的生産物であるという点にあり、またそのような社会的生産物は、その形成と内容において多くの相異なる社会的メカニズムの影響の下にあるという点にある。

概念的抽象化

非常に一般的で重要な概念化の方法は、抽象化によるものであり、そしてそれは「強力な道具であって、それゆえに不注意に使用すれば危険な道具となる」(Sayer 1992: 86) のである。抽象的な概念もしくは抽象化は、私たちが具体的な対象や現象についての特定のあるひとつの側面を分離し隔離 [isolate] させたときに形成されるあるものである。そして、私たちがそこから抽象を行なう抽象元となるものは、具体的な現象が保有するその他のすべての側面である。抽象化は必要である。なぜならば、アクチュアルな領域は、すなわち世界のさまざまな出来事 [events] は、とてつもなく多様化されているからである。気象とか、機械とか、人びとや組織といった具体的な諸現象は、多くの異なった諸要素、諸性質、諸力、諸影響力によって成り立っている。もしも私たちが具体的な対象や現象の説明を行なおうと試みるなら、私たちはその出来事を一緒になって生み出している、それに関与している相異なる諸メカニズムを隔離する手段を持たなければならない。それゆえ、概念的抽象化は、自然科学の実験とある種同等

なものとして社会科学で使用される。

自然科学におけるような実験は、社会科学においては事実上不可能である。社会的対象は、意識的で、意図的で、反省的で、自己変革的である。こうして、社会的世界における生成的な力とメカニズムについての知識を得ようと願ったとき、私たちが扱う最もすばらしい道具のひとつは、出来事による特定の側面の隔離ではなく、むしろ、思考における特定の側面の隔離、すなわち概念化なのである。社会科学の概念化の例は、「階級」、「ジェンダー」、「役割」または「規範」[など] である。

自然的世界と同じく社会的世界においても、研究の対象となっているものは、必然的と見えるもの、すなわちその対象が實在するために、つまりそれがそのようなものであるために、不可欠ともいえるべきある特定の諸性質や諸力を持っている。批判的実在論の分析は、自然必然性についてのこのような理解を中心につくられている。また、私たちの抽象化は、相異なる諸対象におけるこれらの必然的で構成的な諸性質を確定することを、すなわち、その対象の本性 [nature] を確定することを主な目的とすべきである。ここから、因果性の問題へと近づくことになる。

因果性

抽象化は共時的 [synchronous] で、「一瞬の時を凍らせ」、そして「今、ここ」に関係するということ、その本性である。したがって、抽象化は、プロセスや変化について、何も私たちに語るができない。因果分析は、現に起こったことがなぜ起こったのかについての説明に取り組む。もしも私たちがある出来事の経過 [course] の根底に何があるかを知っていれば、私たちはまた、未来の出来事の経過に介入しその方向を指示することができるし、様々な方法で出来事の経過を私たちの意図や目的により

よく適合させることができる。あるいはまた、もしも私たちが出来事の経過に影響を与えることができないと分かれば、私たちはそれでもなおその経過を予測して、それに合わせてうまく対応することができる。

「原因」とは何か

説明することが問題となるとすれば、私たちが打ち立てるべき因果的結合に要求されるものは、普遍的な規則性の性質をもつことであるように見える。それゆえに、経験主義的な社会科学で支配的な方法は、すなわち経験的な規則性や標準化された変数間の共変関係の研究であるということになる。しかし、それは、経験的な規則性と統計的な相関関係以外には、いかなる見解（opinions）も提示することができないのである。〔要するに〕それらの方法は、原因に関する問いに答えることができないのである。

原因は、対象についての、またそれらの（内的）関係および性質についてのものである。それは、ある特定の対象や関係のなかに存在する「因果的な力（causal power）」や「傾向性（liabilities）」の問題なのである。もっと一般的な用語で言えば、それは、

対象がいかに作用するかという問題、あるいはその作用のメカニズムの問題である。こうして、水は火を消す因果的な力を持っているし、生命体は再生産する力を、人びと〔people〕は話し思考する力を、そして人間〔human beings〕は「労働する力」をもっているのである。因果的な力はまた、人びとが作り上げた社会関係や社会構造の内部に探し求められるものである。

力と傾向性は、それが働いているか否か、あるいは持続しているか否かにかかわらず、実在するということを認識することが、決定的に重要である。因果的な力の存在〔についての主張〕は、固定され、変化しない、永遠の本質について想定するものではない。対象は、実際、それ本来の諸性質〔properties〕や本性〔nature〕によって、まさにそのような対象なのである。しかし、すでに私たちが立証したように、その対象の本性は変化するかもしれないものである。もしもそうであるなら、対象の因果的な能力〔causal abilities〕もまた変化するものである。

このメカニズムは、単にAがBという結果をもたらすときにのみ存在するのではなく、AがBの結果をもたらさないときにも、また実在しているのである。

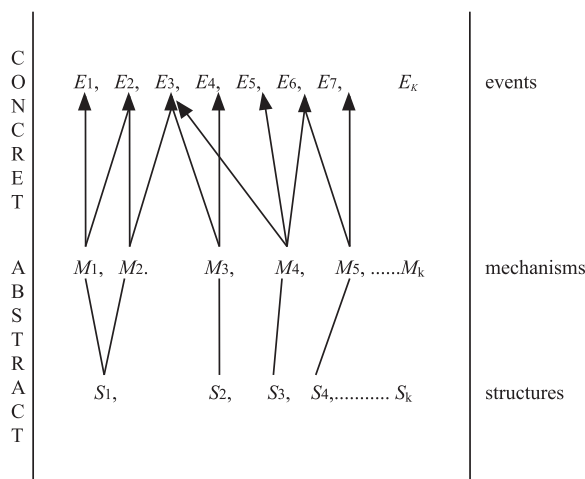


図 構造・メカニズム・出来事

これは、批判的实在論的な因果分析において、きわめて重要な点であり、社会科学的説明にとって広範囲におよぶ帰結をもつものである。生成メカニズムは、その引き金が引かれたときにだけ作動するものである。それゆえ、出来事は、相異なった諸メカニズムから引き出された様々な影響の複雑に合成された結果なのである。そこでは、あるいくつかのメカニズムはお互いを強化し合い、他のメカニズムはお互いの発現を妨害し合っている。

上記の図は、複合的で合成された全体（たとえば人間社会）に存在する一連の出来事、諸メカニズム、諸構造を表している。構造的なメカニズムが活性化されるとき、それらはそのときたまたま組み合わせられることになった他のメカニズムに依存しながら、特定の諸結果を生み出す。そこで、ある特定のメカニズムは、異なるときにはまったく異なった行為を生み出すことができ、その反対に、同じ出来事がまったく異なった原因をもつこともできるのである。

創発的な力とメカニズムを伴った階層化された世界

いかなる種類の対象であれ、私たちが具体的で複雑な対象を分析するとき、その分析は、対象の構成や作用の仕方をよりよく理解し説明できるように、構成要素に分解することを意味している。当該の構成諸要素の性質がそれらの構成諸要素によって組み合わせられた結果そのものを説明することができないという事実は、実在が「表層」的出来事の基礎にあるメカニズムのただひとつのレベルだけを含んでいるわけではないということの徴標〔sign〕である。つまり、世界は単に差異化され構造化されているだけでなく、階層化もされているのである。したがって、メカニズムは次々に実在の異なった層や階層に属するのであり、それらの階層は位階的に組織されているのである。

私たちは、これまでのことを、〔位階的階層の〕「底部」から開始すると想定する簡単な方法で説明しよう。そこでまず、私たちは、最初の階層で物理的なメカニズムを発見し、次に化学的なメカニズムを発見し、3番目には生物学的なメカニズムを発見し、その「頂点」には心理的かつ社会的な階層が来る。これらの階層を通じて「上方」へと移動していくとき、私たちはそれぞれの新しい階層が、その下部に横たわる階層〔the underlying strata〕の力とメカニズムによって形成されていることを見出す。同時に、この新しい階層は、まったく新しく、独自で、質的に異なった何かを表現しており、それは下位にある階層には還元できないものである。下位の階層の諸性質が組み合わせられたときに、質的に新しい対象が存在することになり、その対象はそれ自身の特別な構造、強力〔forces〕、力〔powers〕、そしてメカニズムをもつのである。この新しく独特なものの始まりは、創発〔emergence〕と呼ばれるものであり、その対象は「創発的な力〔emergent powers〕」をもつ、ということができる。

実在の階層化ということの方法論的に重要な帰結は、私たちが各階層にわたって「下方に向かって」因果的なメカニズムを〔順次〕分離していくことができるということのなかにのみあるわけではない。階層化ということのすべてにおいて、本当に重要なことは、「創発〔emergence〕」の概念であり、それぞれの特定の階層に付け加えられた還元しえない新しい特性やメカニズムの理解である。より「浅い」階層の法則を何らかの意味で説明するようなそうした法則をもった基礎的な階層の存在は、たとえば、すべてを説明可能にし、他の諸科学を余分なものとするような、十分に発達した物質科学〔が可能になる〕という憶測をもたらしした。しかし、そうした「物質還元主義」は創発的な力という現象を無視している。たとえより基礎的な階層内のメカニズムが、それよりも基礎的でない階層のメカニズムについて何ごとかを説明できたとしても、基礎的な階層内の

メカニズムはその〔基礎的でない階層の〕すべてを説明し尽くすことはけっしてできない。それゆえ、どのメカニズムが当該の研究の対象にとって最も重要かという問題は、経験的研究を通じて、また私たちが取り組む問題との関係で、ケースバイケースにのみ決定できるのである。

私は、以上で、批判的实在論の基礎的諸概念のいくつかについての案内を行なったことから、明日〔の報告では〕、〔さらに〕いくつかの方法的結論を

引き出すであろう。そしてまた応用的で、批判的实在論的な社会的研究を行なうにあたっての、10の方法論的ガイドラインを提示するであろう。

※本報告で参照指示されている文献は以下のものである。

Roy Bhaskar, *A realist Theory of Science*, Harvester Press, 1978（式部信訳『科学と实在論』法政大学出版局、2009年）

Andrew Sayer, *Method in Social Science: A Realist Approach*, Routledge, 1992